

Ohmi Net

おうみネット

おうみネット

Communication Paper for Voluntary Network in Ohmi

人と人をつなぐ♥ 作 杉尾尚子

ネットストーリー

“おうみNPO活動基金”編



シリーズ～NPOへの素朴な疑問～<第12回>

NPO評価と情報公開

市民&企業&行政ネット

め・と・て・とねっと

ジャスコ西大津店

「環境」と「地域還元」をキーワードに

誰もが参加しやすい社会貢献活動の輪を広げていきたい。

おうみネット リレーエッセイ

トピックス

～これからの滋賀をつくる
NPOの基盤強化を目指して～

スポットライト

私たちががんばってます!NPO

■劇団「モモ」

■町のオアシス

■セブン・ドロップス

伝言板 3月・4月

センターインフォメーション

おうみ未来塾第5期塾生募集

March

No. 34

2003・3

淡海ネットワークセンター

淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

シリーズ～NPOへの素朴な疑問～

[NPOって ナニ?]

第12回 NPO評価と情報公開

手元に「月刊ボランティア臨時号」（社会福祉法人大阪ボランティア協会発行）という雑誌がある。この雑誌には協会の歩みを題材に、事業報告と事業計画が約80ページにわたって詳しく載せてある。大阪ボランティア協会は1965年にできた老舗のNPOで、その活動は多くの会員やボランティア、寄付者などの支援者によって支えられている。したがって、支援者に協会の活動を理解してもらうことが大切だという趣旨で、毎年6月に事業報告などを分かりやすい形で掲載した臨時号を発行している。市民に開かれた運営で、積極的な情報公開だと言えるだろう。

特定非営利活動促進法はNPO法人に情報公開を義務づけている。NPO法人は所轄庁に対して年1回、事業報告書と決算書類を提出し、さらにその書類を事務所に備え付けて、利害関係人に閲覧させることとなっている。よくNPO法人格を取得すれば、信用が得られると思われているがそうではなく、NPOの信頼性は情報公開の程度とその積み重ねによるのである。

NPOの人から「いいことをしているのに評価してもらえない」「寄付が集まらない」「参加者が増えない」などの声をよく聞く。NPOの特徴の一つに先駆性というのがあるが、まさに先駆的なものはとかく世間では評価されにくい。この評価されにくいものをどのように前向きな評価につなげていくのか、のツールが情報公開である。どんなにいいことをしていても、情報公開をしなければ決して評価されることはない。情報公開はNPO評価の第一歩であると言える。

NPOは量から質への時代が変わってきており、その質を表すのが評価である。NPOが積極的に情報公開を進めることにより、NPOの組織体制、事業内容、会計などが透明になり、NPOに対する評価が進む。評価の結果、支持されない事業の見直しも行われていく。NPO評価は会員や寄付者など、NPOを支援してくれる人たちとNPOをつなぐ唯一の手段なのである。
(市民熟人)

※「月刊ボランティア」は、今年から「V.o.i.o. (ヴォイオ)」に誌名変更された。

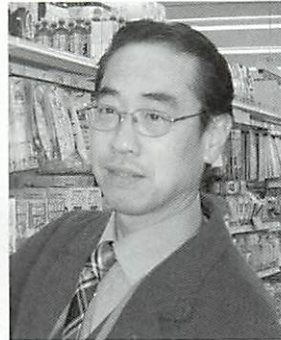
資源のリサイクル現場。写真はトレイを熱処理して固めたもの。



大津市障害児父母の会の「古本市」は大盛況。



毎月11～13日にはイエローシートキャンペーンに協力しよう！



副店長の仲上道夫さん

めとてとねこ

市民&企業&行政ねこ

「環境」と「地域還元」をキーワードに
誰もが参加しやすい社会貢献活動の輪を広げていきたい。

ジャスコ西大津店

ジャスコ西大津店はオープンして7年目。毎月11日の「イオン・デー」を中心に、市民が参加しやすい社会貢献活動を展開。11～13日の3日間は「イエローシートキャンペーン」として、買い物をするに渡される黄色いシートを、NPOやボランティア団体などを紹介する投函BOXに入れば、合計金額の1%が応援したい団体に還元されるというもの。ちょっとした気持ちで支援につながる、わかりやすい仕組みです。

1997年には地球にやさしいエコ活動を「イオン西大津子どもエコクラブ」を結成。毎月1回子どもたちと一緒に自然や環境について学んできました。昨年度は「源氏ボタル観察会」や「船上セミナー」など大津市や滋賀県とも連携。サポーターを務める副店長の仲上さんは、「子ども達といっしょに、身近な自然を見直す良ききっかけとなっていますね」。

毎日の環境活動では、買物袋持参運動や資源回収活動を呼びかけています。1回レジ袋を持参すると、カードに1個スタンプを押印し20個たまると、環境保全型商品と交換。また、お持ち帰り専用カ

ゴ「マイバスケット」(300円)も販売(破損したら無料で交換、引越して不要になったら返金)。カゴはカートに載せて買い物し、そのまま持ち帰れると大変好評です。西大津店はお買物袋持参率が16.8%で、西日本エリア全店舗ではNO.1、マイバスケットの販売数も1位とか。「琵琶湖を抱える滋賀県民の環境意識の高さは素晴らしいと思いますね」。

毎月イオンデーには、従業員自ら店舗周辺やR161の清掃活動に取り組まします。ほんものの緑の環境をつくらせ、地域の植生にあった苗木をボランティアと共に植樹する「ふるさとの森づくり」もオープン以来続いています。「環境」と「地域還元」をキーワードに市民との協働という年輪をきざみながら、イオンの苗木はやがて資源循環型社会のシンボルとして大きな樹木に成長することでしょう。



「イオン西大津子どもエコクラブ」は4月に新会員募集。

イオン株式会社 ジャスコ西大津店

TEL 077-528-5700 FAX 077-528-5671 <http://www.aeongroup.net>

「埋もれた宝と町づくり」

心をむすんで* リレーエッセイ



西村 恵美子さん

今回は大津の町家を考える会の
青山富子さんです。

「町づくり」「町おこし」という言葉がまだ市民権を持たなかった約二十年前、歴史的遺構としての八幡堀の景観に、「浜ぐら」はなくてはならないものとして、純粋な気持ちで保存修復に取り組んだことを思い出します。

以来いぶし銀の様な宝物が埋もれている町を、どう甦らせるか、掘り起し過ぎて、また磨きすぎてもいけないという課題を抱えながらの活動でした。

県の景観審議会や近江八幡の町づくりの中で思った事は、この町に息づいている歴史の重みと、脈々と受け継がれてきた生活文化と、精神の継承と保存が根底にあつてこそ、近江八幡の誇りつづける町づくりがあるということです。

八幡堀の長い歴史の流れの「コマ」に身を置き再生運動に関わってきたこと、また二百年余り続いた町家の隅々にまで染みついた先人の心入れを肌で感じながらの生活。これらの経験から、単なる修景保存では将来魅力が薄れていくのではないかと危惧されます。現代のニーズ、文明の利器を取り入れつつ、最も大切な生活者との関わりを意識した近江八幡の街を次世代へ継承していくために、少しでも役立ちたいと願っています。

TOPICS

おうみNPO活動基金

「これからの滋賀をつくるNPOの基盤強化を目指して」

NPOの資金面での基盤強化を図るため、おうみネットワークセンター（財団法人淡海文化振興財団）が今年度創設した「おうみNPO活動基金」。第1回助成事業には90団体の応募があり、書類選考、公開プレゼンテーションを経て、8団体への助成が決定しました。今回の特集では、おうみNPO活動基金サポート委員会委員長として基金運営全般に関わっていただいている新川達郎さんにお話を伺いました。



おうみNPO活動基金サポート委員会



新川達郎さん

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授
専門分野は、行政学、地方自治論、公共政策論。主な著書に「行政と執行の理論」「地域空洞化時代の行政とボランティア」「地方公務員のためのNPO読本」ほか多数。おうみNPO活動基金サポート委員会委員長。

今回、制度設計から基金の運営全般に関わられての感想をお願いします。

新川 この基金の発足からずっと関わってきて、実際にどれぐらい応募があるのかはすっと気がかりでした。基金の性格から、しっかりとした企画書・提案書を出すという手続きもなかなか大変ですし、難しいところがあるかなと思っていたのですが、蓋を開けてみると90件という応募があり、これは本当に嬉しいような困ったような、改めていろんなことを感じさせられました。特にこの90件というところで言えば、実際の提案の中身や書類の作り方は別にして、少なくとも滋賀県内のNPOの方々が、この基金への申請という形で、自分たちの事業やNPOの将来を日に見

えるものにしていう努力を明確にされてきているということ、つまり、組織としてのミッションやその事業性を表現しようとしておられる。大変真摯に熱心に取り組んでいたというのがよく見えて感じました。

全国的に見て今回、センターが作った基金に対する評価というのはどうお考えでしょうか。

新川 そうですね、この基金はある程度大きな金額を継続的に出そうというところに特徴があります。もうひとつはNPOの活動の継続性や発展性に主眼を置いています。そういう意味では、その社会的な役割、インパクトは大きかったのではないかなと思います。事業を大切に、NPOの活動基盤を支えるという点で

は、それなりのスタンダードを作ったのではないかと考えています。ただやはり、この基金の規模や狙いなどの程度きちんと理解されているのか。それからもう一方ではそのねらいと基金の金額あるいはその出し方が適切だったのかどうかについては、今後さらに検討していく余地はあるだろうと思います。



おうみNPO活動基金のプレゼンテーションの様子

助成決定団体 8団体 (順不同)

- 農業小学校をつくる会 (栗東市)
 <事業名>みんなで耕す【小】学校「草の根農業小学校」および自然・生活体験キャンパス「くつき子ども村」の運営
 <助成金額>1,310,000円
- おおつ環境フォーラム生ごみリサイクルプロジェクト (大津市)
 <事業名>生ごみリサイクルテスト事業
 <助成金額>500,000円
- 菜の花プロジェクトネットワーク (安土町)
 <事業名>菜の花プロジェクト経済性確立検討事業
 <助成金額>500,000円
- 特定非営利活動法人NPOほほハウス (彦根市)
 <事業名>子どもの健全育成のための子育て支援事業
 <助成金額>1,180,000円
- NPO蒲生野考現倶楽部 (蒲生町)
 <事業名>「しゃくなげ学校」開設事業
 <助成金額>1,620,000円
- 特定非営利活動法人朽木針山人協会 (朽木村)
 <事業名>「プロジェクト山帰来2003」過疎地再生と活性化を目的とした「地域まるごと博物館」の展示及びインフォメーションのための施設づくり
 <助成金額>1,880,000円
- スペースWILL (竜王町)
 <事業名>不登校生ケアサポート事業
 <助成金額>610,000円
- 特定非営利活動法人CASN (大津市)
 <事業名>チャイルドラインの開設
 <助成金額>2,430,000円

基金原資が5000万円ということもあって、今回は8団体しか助成することができなかったのですが、助成団体を通ったポイントとか、この辺が全体として良かったとかの感想をお願いします。

新川 今回の選考は、当然その事業がNPO活動としてふさわしいかどうか、そして、その事業を通じてNPOの活動がしっかりと基盤強化をし、さらにステップアップしていくかどうかが、というところにポイントがあり、従来型の事業企画提案型のコンペとは少し色合いが違ったかもしれないですね。ですから、自分たちの優れた企画を認めてもらえなかったということでご不満の方もいらっしゃるでしょうが、私たちはそれぞれ個々の事業の特性、それが各団体にとって、将来の活動、発展にどう繋がっていくのか、ということを見極める

ために意を尽くしたつもりでしたし、その趣旨で審査するということを公にしてきました。その観点から今回の審査のポイントも、もちろん事業企画の良し悪しということもありますが、同時にそれがそれぞれの団体にとって、どれぐらい活動基盤を支えていくことになるのかということが、大きなポイントだったように思います。

今年落ちた団体も含めて、来年応募されるところへのアドバイスをお願いします。

新川 ぜひもっとたくさんの方に申請して頂いて、審査側が困るぐらいに増えればと思っています。ただし、その時には、やはり今年の応募でもそうだったのですが、基本的には事業計画をきちんと書くという点、その事業計画が持っている意味を明確に伝えられるような応募の仕方をしていただきたいと思います。例えば、

申請書に客観的で実現可能性のある具体的な数字が表現されているとか、当該団体の活動として、まさにその中核になるような事業を今決めようとしているとか、そういうところがはつきりと審査員に伝わる、そういう応募書類の作り方、企画提案の仕方を期待しています。

今年、すでに助成を受けておられるところについて言えば、この1年間で何をどこまでやれたのか、この1年間の蓄積をどう評価して、その上に立って次の事業をどう展開できるのか、そういう意味でのハードルの高さを考えていただければ良いと思います。

基金の今後のあり方についてアドバイスをお願いします。

新川 5000万円という金額を使い切りで出していく、そしてその間に県内のNPOがしっかりと活動基盤を作りあげていくということがこの基金の狙いですが、初年度の応募状況、そして今後ますますNPO・市民活動が広がるであろうという社会的な大きな流れの中で考えてみた時に、3年とか5年で使い切ってしまうような出し方で、本当にNPOの活動基盤を支えるということになるのかどうか。この点については少し検討する必要があるだろうと

思います。NPO相互間の競争と、そしてその中で新しいNPOに生まれ変わっていく、あるいは成長していくというプロセスそのものを、県全体として作っていくか、という点と理解して、この基金の目的だとして、その意味では、助成の年限等々は別に、もう少し継続的に長期にわたる視点でNPOの活動基盤支援を続けていく価値はあるんじゃないかと思っています。

基金の出し方ですが、淡海ネットワークセンターという財団を使う方が、今後とも本当にそれで良いのかについても、検討を要すると思っています。仮にこうしたNPO支援を続けていくとしても、センター自体が県設置による財団で、その運営についてもやはり県政の政策の方向性を実現しているというところもあります。本来のNPO支援のための基金を考えたときに、財源は公的な資金であれ、NPOにそれが届く時にいわばそうしたお金の出元とNPOとの関係を一旦断ち切るような役割が、支援財団等の基本的な役割としてあるのだからと思います。つまり財団によるNPO支援と県の出捐による基金との関係をきちんと区別できるかどうかがこれからは問われていくと思っています。

本日はありがとうございました。

私たちががんばっています！

NPO

どっつうふうにしたら、もっとみんながイキイキと元気に暮らせるか—そんな素敵な夢を現実のものにするために、日夜奮闘しているNPOの皆さん。環境・福祉・子ども・まちづくりetc. . . . 滋賀県に新しい風をおくるフレッシュな市民活動をご紹介します。

演劇から生まれた「大きなひとつの家族」

●劇団「モモ」

要と、はじめてオーディションを行いました。

「モモ」はチケットもプログラムもポスターも全て手作り。みんなの協力なしにはやっていけません。牽引役は若いお母さんたちですが、100名を越すメンバーが「大きなひとつの家族」のようにあたたかな雰囲気のコミュニティーを作り出しています。

(編集ボランティア 大山純子)

東浅井郡湖北町に住民たちで結成されたボランティア劇団があります。その名は「モモ」。劇団「モモ」は5年前、湖北町の移動子育て支援事業「ひまわり広場」に参加した若いお母さんたちとひまわりのボランティアの人たちで「何かしたいね」と話し合い、「子どもたちに見せてやりたい」と「桃太郎」の劇を公民館で演じたことに始まります。

思いのほかの好評に気をよくして、翌年は町内の小・中・高校生に声をかけて子どもミュージカル「白雪姫」を上演。3年目は、いじめ問題を題材に、湖北町の自然や野鳥センターが登場する創作劇「君がくれた翼」を完成したばかりの町立文化交流センターで発表しました。

演劇の面白さはいろんな人がいろんな能力を發揮し、力を合わせて完成さ

せるところにあります。「モモ」では、保育園児から70代のお年寄りまで、「全員でやる」をモットーに練習に励んでいます。公演のための練習だけでなく、基礎力をつけることも大切と、クラブを結成して定例の活動を始め、4年目には「モモフェスタ2002」と題し、湖北町の山本山と野田沼を背景にした演劇「蛇の壺伝説」や朗読劇なども発表しました。

今年2月には、車いすのダンスも登場するオリジナル作品「ダンス！ダンス！踊っている君が好き」を出演者103名、スタッフ70名で公演。2回上演のチケットは公演10日前に完売。またこの公演に先立ち、配役を一方的に決めるより、「選ぶ・選ばれる」厳しさも必

ず



●お話をうかがったメンバーの皆さん。左から三宅さん、横尾さん、臼井さん、野橋さん。

劇団「モモ」

代表 ●横尾明美
連絡先 ●TEL/090-5962-3225
設立 ●1998年
会 員 ●約200名



●1歳から70歳代まで、幅広い年齢層のメンバーが揃っています。



●手書きのイラストが描かれた公演のチラシや台本、チケットなどもすべて自分たちで手作りしています。

各世代が参加型で、それぞれの思いを形にする場

●町のオアシス

大津市丸屋町商店街の空き店舗を活用したコミュニティホールに「町のオアシス」が誕生したのは2000年8月のこと。それ以来、モットーである「元気が出て居心地よく暮らしやすい街づくり」を目指して活動が続き、地域の人たちの憩いの場、交流の場となっている。

その活動内容はまことに多彩で、なつかしい昭和初期の写真展、大津絵やくみひもの体験会、初春風展やお宝おひなさま展といった季節感のあふれるものまで盛りだくさんである。いずれも地域の人たちの作品が中心で、なかには92歳の岩佐さんの「生まれて初めての作品展」と題した南画展もある。町のオアシス壁新聞の編集長さんは91歳というから、ここでは80歳を超えないと高齢者といわれない。

しかしここ

は単に、高齢者だけが心豊かに日々過ごしたいと集う場ではなく、子育て世代や学生なども交えた世代間交流の場であり、

各世代が参加型で、それぞれの思いを形にする場でもあるのだ。

「常にやれることを懸命にやる、という思いで全力投球の毎日です」とスタッフたち。いま力を入れて取り組んでいるのが「おおつげんきくらぶ」の助成を受けた「かいいものオアシスト」の養成。高齢者が住み慣れた町でいつまでも買物を楽しめるようサポートしていく。

モットーの実現を目指して「町のオアシス」はますます元気だ。
(編集ボランティア 森口行雄)



●代表の福井美知子さん(左)と運営スタッフの生田美和子さん

町のオアシス

代表 ●福井美知子
連絡先 ●大津市中央一丁目8-13
TEL・FAX/077-527-5370
設立 ●2000年8月
会 員 ●運営スタッフ11名
企画スタッフ約30名
URL ●http://oashis.hp.infoseek.co.jp/
E-mail ●oashis@mail.goo.ne.jp

セブン・ドロップスは、おうみ未来塾1期生の研究グループとして誕生しました。

おうみ未来塾とは、淡海ネットワークセンターが主催する、「地域プロデューサー」養成塾。セブン・ドロップスは「環境」を研究テーマにしましたが、環境の中でも「水」という目で見えるものに対して、環境への配慮で流域の人々がどういうふうに関わるかを探るため調査活動を始めました。

水源寺町から西の湖へ流れる蛇砂川をフィールドに決め、現地調査や上流から下流で暮らす人々の「水」に関する意識アンケート調査などを地道にすすめるうち、メンバーから「狂言」で環境問題を表現したら? というアイデアが出され、これが湖国21世紀記念事業にも採択され、2001年6月「流域フォーラム」の中で東近江水環境自治協議会と連携して環境創作狂言「琵琶の湖(うみ)」を上演し、大成功。外来魚や水環境の問題を、美しい舞台と笑いで訴えました。

その後、世界湖沼会議でも「琵琶の湖(うみ)その後」を上演。おうみ未来塾卒業後の昨年11月には彦根で子ども環境創作狂言「芹川」を地元環境グループ

ープと共に催し、成功をおさめました。

「難しく思われがちな環境問題を、実は身近な事なんだと気づいてもらうため『狂言』を使いました。実際、外国の方にも笑ってもらえました」と代表の澤さん。3月にはびわ湖水フェアでビデオによる活動報告を予定、3月20日には東近江水環境自治協議会主催で環境創作狂言「琵琶の湖(うみ)」の再演も。おうみ未来塾から飛び出したセブンドロップスの活動がこれから



●「芹川」で遊ぶ子どもたち! 流域ワークショップ



●楽しい中にも環境問題を考えさせられる「子ども環境創作狂言」

セブン・ドロップス

代表 ●澤孝彦
連絡先 ●TEL/080-5713-4476
設立 ●2000年4月
会 員 ●8名



●代表の澤さん

「環境創作狂言」として開花

●セブン・ドロップス

おうみ未来塾第5期塾生募集

あなたも「地域プロデューサー」をめざしませんか！
 受講期間：2003年6月から2005年3月までの2年間
 募集人員：25名程度
 応募資格：18歳以上で地域の課題に主体的に取り組む意欲のある方
 受講料：2年間で2万円
 開講式：2003年6月7日（土）午後
 応募締切：4月13日（日）までに所定の応募書に必要事項記入のうえセンターまで申し込んでください（センターホームページからダウンロードできます）
 ※募集に関する詳細は、センターまでお問い合わせ下さい。

カリキュラムの説明

- ①塾の開講日は月1回を原則にしますが、2年目はグループ研究の進捗等により、月2回以上になることもあります。
- ②開講の曜日、時間、場所は講師や塾生の意見を聞きながら設定します。
- ③知識や情報の提供にとどまらず、実践的な能力の向上を図る塾とするため、ディスカッションに重点を置き、毎回レポートの提出を求めます。
- ④グループ研究は、テーマごとに塾生数名がグループになり調査や考察を重ね、研究成果として政策提案することを目指します。研究活動を円滑にするため、指導・助言できる人を各グループの希望に応じて配置します。
- ⑤グループ研究を中心に、2年間の成果をまとめます。
- ⑥可塑性を大事にする塾ですので、塾生会を設け、幹事が塾生の意見を聞きながら事務局と一緒に講義内容、講師等カリキュラムを決めていきます。したがって、第4期塾生とカリキュラムの内容が異なる可能性があります。

参考カリキュラム（第4期生）

- | | |
|-----------------|--|
| 2002年6月 開講式 | ●知事あいさつ、塾長講話・交流会など |
| 講義 | ●活動に取り組むうえでの理論、実践の講義、ワークショップでのコミュニケーション、課題解決手法など |
| サブ講義 | ●講義と関連のある内容や卒業生の活動を聞く等を平日夜に実施 |
| 県内研修 | ●研修先の現地視察とキーパーソンとのディスカッション（塾生の要望により、宿泊研修を実施） |
| 塾生会 | ●塾生相互に活動情報や意見を交換したり、より交流を深める |
| 2003年4月 グループ研究 | ●テーマ別にグループに分かれての自主的・実践的研究活動（月1回は必須） |
| ●目標発表会、中間発表会 | |
| 県外宿泊研修 | ●県外に視野を広げる研修・交流 |
| 講義 | ●ワークショップでのリーダーシップ、プレゼンテーション技法など |
| 2004年3月 グループ発表会 | ●公開での研究成果発表会と閉講式 |
| | ●塾長講話など |

編集後記



踊っているときの陶酔感、幕が降りた時の感動。劇団「モモ」を取材して、久しく忘れていた学芸会で主役を演じたときのことを思い出しました。いま学校では学芸会はないそうです。学芸会をする「ゆとり」がないのでしょうか。

（編集ボランティア・大山）

セブンドロップスの企画された環境狂言は、一見の価値あり！ただしメンバーは裏方に徹するプロデューサー。一舞台にかける労力はすごいもの。でも今後の計画にも夢がいっぱいでした。

（編集ボランティア・幡）

さみしくなっていく商店街をどう活性化していくか、全国で問題になっている。丸屋町での活動はその対応策の一例として示唆に富んでいる。多彩なアイデアと活発な活動の今後におおいに期待したい。

（編集ボランティア・森口）

淡海ネットワークセンターができて丸6年。おうみネットも34号を数えた。紙面構成、内容など改良の点は多々あるが、情報提供に関しては一定の役割を果たしているのではないかと。ただ、おうみネットが目指してきた「情報交流」、すなわち双方向コミュニケーションはまだ道半ばである。それと、編集ボランティア以外にも幅広い紙面づくりへの市民参加が必要な時期に来ている。

（事務局・阿部圭宏）

淡海ネットワークセンター運営委員がすすめる



「森はよみがえる 都市林創造の試み」

石城謙吉著 講談社現代新書 680円（税別）
 里山、鎮守の森、ため池・・・身近な自然の荒廃が進んでいる。本著は、荒廃していた森（北海道大学苫小牧演習林）を都市林としてよみがえらせた、20年以上にわたる取り組みを紹介したものである。市民に積極的に開放することにより、市民との信頼関係が築かれ、生き生きとした豊かな森として再生した。それにしても、「よみがえる」とは何とすばらしいことであろうか。高度経済成長期やバブル期に、日本と日本人が失ってしまったものをよみがえらせることが、いま強く求められているのではなからうか。
 （森川稔）

「エコ・エコノミー」

レスター・ブラウン著 監訳：福岡克也・訳：北濃秋子 家の光協会 2,500円

環境的に持続可能な経済を実現させるためには、経済学者と生態学者が協力して新しい経済を設計することが必要と説く。
 古代文明の盛衰や、このところ急速に発展を遂げた中国の現状などを例に、現在の危機的状況を分析、リサイクルや新しいエネルギーシステムなど、今後の変革に必要な産業分野を示し、新しい経済のかたちへの移行を促す。
 「改革断行決断の時は今！」と言う。NPOにかかわる私たちは何をすべきか？を考えさせられる一冊である。

Voice

官製NPO? 歯止めを!

本誌33号で官製NPOの実在におどろいています。私共は、自治体から事業を受託し運営をしていますが、主体的に提案し、リスクも共に負う姿勢でもって協働しております。行政が後から追いつけてのスタイルです。そこで提言します。県民の財産である施設に実績のない任意団体が加わって通年来居座っているのを見受けませんが、公益事業であるなら、競争入札制にすべきではないか、と。一定の資力が問われると思いますので、NPOへの公共事業委託が推進されようとしている昨今です。官製NPO?に強く歯止めをしたいものです。
 （近江八幡市の読者より）

淡海ネットワークセンター

（財）淡海文化振興財団

- TEL 520-0801 大津市におの浜1-1-20
- TEL 077-524-8440 ■FAX 077-524-8442
- http://www.biwa.ne.jp/~ohmi-net
- E-mail:ohmi-net@mx.biwa.ne.jp

ご利用日時●月曜日と祝日の翌日を除く毎日（12/29～1/3を除く）
 火～金曜日/9:00～19:00 土・日曜日、祝日/9:00～17:00

●淡海ネットワークセンターの情報交流誌「おうみネット」は次のところに配布しています。
 ●各地域振興局、県情報室、県内図書館、琵琶湖博物館、男女共同参画センター、文化産業会館、陶芸の森、草津コミュニティ支援センター、県社福協ボランティアセンター、大津市生涯学習センター、さきほホール、滋賀銀行、郵便局（ボランティア貯金窓口）、公民館など



©無断転載を固くお断りいたします。

